
と化した俺が女体化した友達とゲームの世界で奴隷ハーレム組んでオワタ式で冒険しに逝くけ

低学歴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生でチートと化した俺が女体化した友達とゲームの世界で奴隷ハーレム組んでオワタ式で冒険しに逝くけど質問ある？

【Nコード】

N0941BA

【作者名】

低学歴

【あらすじ】

タイトルが長すぎる？知ったこっちゃねえ！

ある日、体感型ゲームを買い、プレイしていた俺と友達。気がつくとき……死んでしまっていた！

神様から、死んだ理由がアホすぎるということで転生させてもらえました。

チート能力を俺に与え、友達はゲームキャラの容姿を受け継いでいた。

しかし、神様はとんでもない条件を出しやがった。

「一発ダメージ受けたら死ぬから」

転生先は……さっき死んだゲームじゃねえか！

なに？ 奴隷？

いいね、この美少女たちをもらおうか！

最初こそ大人しかった彼女たちだが、俺が「一発で死ぬ」と知ると、素で対応してきやがる！

足舐めろじゃねえよ、立場逆転してんじゃねえか！

体感ゲーム始めました(冷やし中華始めました的なニュアンスで)

まずはタイトルについて触れようか。

うん、そうなんだ。

これはテンプレを詰め込みすぎて、いったい何がしたいのかわからなくなった……

いわば、神々の遊び？ という奴なんだ。

いまさら謝って許してもらおうとは思っていない。

けれど、君はこのタイトルを見た時、こっ「ヤリスギ」みたいな物を感じたと思うんだ。

一撃で死んでしまうという荒んだ世界で生きていく主人公を見ていても、その気持ちを忘れないでほしい。

じゃあ、まずは質問を聞こうか。

……。

超立体感型ゲーム「俺の勇者がこんなになめらかに動くわけがない」を購入した、俺「北田広太」と、友達「長谷圭吾」。

二つのダンボールが、パンパンに膨れているのを見て、俺たちは顔がほころんだ。

「なあ、広太。これ、どういう風に動くんだろうな？」

いつもは冷静な圭吾が、足踏みしながら訊ねてくる。

もちろん、俺もバタバタと足踏みしながら答える。

「きまつてんだろ。あれだよ、あれ、ナメクジ？」

「なめらかどころのレベルじゃねーよ!!」

的確なツツコミに満足して、俺は早速ダンボールを開けた。開けたと同時に、ゲームがドサツと盛り上がり、溢れてくる。隣に目を向けると、圭吾の方はすでに腕に手袋をハメていた。

それにならい、俺も着けていく。

足は、長靴を素足で履かされたような感触の靴下だった。その上に更に靴を履く。

それだけで、狭い部屋の中をバツク転するほど興奮していた。もちろん出来るはずもないので、床に頭から激突してもんどりうっていたが。

圭吾は、そんな俺に冷ややかな視線を送りつつも、頭に取り付ける装置みたいなのをかぶった。

頭の三倍はありそうな大きさに、丸いフォルム、真っ黒なデザインが光る物だった。

「パソコンに繋がればいいのか？」

首が折れるんじゃないか、と考えてしまっほほどデカイ装置をかぶりながら、圭吾は言った。

俺はそれに頷く。

「なあ、どうなんだ？」

更に圭吾が言ってきた。

しつこい。

また首を縦に落とす。

「いや答えるよ!!」

「だから頷いてんだろ!？」

「見えるわけねーことぐらい想像しとけよ!!」

「だったら千里眼ぐらい持っとけ!!」

「無茶言つなよ!?!」

宇宙飛行士のヘルメット（のような物）をかぶった男と、頭にタ
ンコブを付け、手足に変な手袋足袋を履いている男が喧嘩するとい
う、かなりシュールな光景になっていた。

とりあえず、俺も宇宙飛行士のヘルメット（のような物）をかぶ
る。

「おい」

圭吾が、少し苛立った声で言った。

「なに?」

「ちよつと、パソコンに繋げてくんね?」

「あー、俺もかぶってるから無理」

「なんでだよ!? ええ、なんでかぶってんのお前まで!?!」

「いやあ、小さい頃の夢が飛行機のパイロットでさ」

「全然関係ないだろ!!」

「こつという服装に憧れてたんだよねえ」

「お前、全世界のパイロットに謝ってこいよ!!」

「じゃあ……行こうか、ハネムーン」

「ツッコミきれねえよ!!」

「あ、分かんない? ハネムーン、月^{ムーン}で、今宇宙飛行士の格好み
たいじゃん?」

「分からなくもないけど一旦黙ろうか……?」

さんざん圭吾を小馬鹿にしたところで、ようやくヘルメットを脱
いだ。

俺は清々しい顔をして、窓から見える青空を覗く。

「……やっと帰ってきた。俺の故郷、地球」

「さっさとしろ馬鹿!!」

そろそろ圭吾が、ヘルメットをかぶったまま殴りかかってきそうなので、パソコンを立ち上げた。

正直、後ろでデカくて真っ黒なヘルメットをかぶった男がうるちよろしているというのは、かなり不安だ。

というか、不審者だ。

外から家の中を簡単に覗ける構造になっていたら、今頃警察が来ているところだろう。

二代のパソコンに、付属のケーブルを差してゲームと繋げる。

更に、自分たちに着けている手袋などから伸びているコードも繋げて、準備完了だ。

「起動、つと」

「うほっ!」

圭吾が、なにやら気持ちの悪い声をあげた。

さっそく俺もヘルメットを着けてみる。

あれ、なんにも見えない。

「圭吾、なんにも見えないんだけど、これどうなってんの」

「おま、逆だろソレ」

「あっ」

クルツ、とヘルメットを180度回転させると、目を細めてしま
うほど眩しい光が俺の視界を射た。

目が慣れてくると、目の前にはゲーム画面が広がっていた。

タイトルが浮かんできて、下に制作日時などが細かく書かれている。

グラフィックも細かく綺麗で、完全にリアル世界だった。

「うほおおおおお！」

歓喜の声をあげる。

隣から「キモッ」という言葉が聞こえた気がするが、気のせいだ。手を上げてみると、ゲーム画面にCG化された俺の腕が出現して、動いている。

「おお！」

次に足を上げてみると、これもゲーム画面に出てきた。

「おおお！」

スタート、と書かれた部分をCG化された指でタッチすると、セーブデータを確認する画面へと映り変わる。

「おおおお！！！」

「うっせえ黙れ！！！」

友人の怒号に絶句しつつも、その臨場感に俺はドッキリとはまり込んでいた。

新規データをタッチ。

すると、男のキャラクターが上半身裸、下半身はブリーフ一枚で現れた。

名前欄には「無職のプー」と書かれている。

「なんでプー!?!」

「無職ってなんだよ! 明らかにゲーム買った奴に喧嘩売ってんじやねーか!?!」

俺たちは健全な男子大学生です。

「圭吾、お前キャラクターどうすんの?」

顔メイクなどをいろいろいじりながら、聞いてみた。

「ああ、女の子にするけど?」

「止めとけて……。声でどうせバレるんだから」

そう。これは音声対応だ。

やり方によっては、上手く声を無くし、チャットのみも出来るが、ネカマ防止用ということで普通では外せない……らしい。説明書に書いてた。

……説明書の最後のページに「女の子だと思ってたらオッサンだった。絶対に許さない許さない許さない」と、呪詛よろしく書き連ねられていたのは目の錯覚だろう。

「決めたか?」

「おう、決めた」

「サーバーどうする?」

「んー、2の3にしようぜ」

「キャラの名前は? こっちは『圭子ちゃん』だけど」

「うわあ」

「なにその反応」

「大丈夫。引かないよ、俺は」

「分かったから。んでお前、名前は?」

「『暗黒より深淵を覗き闇に身を委ね光を求めながらも避ける強き力を持ちながらも弱い心を持つ孤高の狩人ワールドデスライダーアームズ』

「痛い！！ 中高と部活に入ってたクセに、いきなり作詞作曲をやりだして、自分ポーカーで他のメンバー募集してる奴並みに痛い！！」

「相当じゃねーか！」

あんまりすぎる例えにツツコミながらも、俺はゲームを始めた。

フューチャークエスト

現れた我が分身は、とてつもなく格好良かった。

髪型はFFのクラ ドみただし、服装はアーク ラッド3の主人公みたいだ。

今、俺は自分のステータス画面を見ながら、ひたすらに自分の格好良さに酔いしれていた。

「よっ」

馴染みのある声が聞こえ、ステータス画面を閉じ、辺りを見回す。後ろに振り返ると、美少女が立っていた。

髪はポニーテールに結んでいて、茶色という無難な形。顔もなかなか好きなグラフィックで、ドキリとした。

「どうした？」

あ、声キモい。

「なにがキモいだ！ お前も全く似てねえじゃねえか！」

「いや、これが俺の真の姿さ」

「ゲームでしか表現できない真の姿に泣け」

「おいおいおい」

「やっぱ止める」

「はい」

さすがに、この姿で泣いているというのもかなり情けない。

格好良すぎて、むしろダサイ。

街の中へ入る道の途中、圭吾のキャラクター「圭子ちゃん」が話

しかけてきた。

「お前見つけるの、めちゃくちゃ簡単だったわ」

「あ、やっぱり似てるから?」

「んなわけねーだろ! その長ったらしい名前を見る!」

確かに、俺の名前はかなり長い。

三人称視点に戻すと、名前が画面端まで届いていて、全部読めなくなっている。

「なんて呼べばいいの? お前のこと」

「暗黒より(〽中略〽)スライダーアームズだからあ、『セイントセイバー』って呼んでくれ!」

「なんで暗闇の戦士のあだ名がセイントセイバー!? 真逆だよ、それ!？」

「固いこと気にすんなよ。『敬遠する神にも少なからず情を持ちトドメを刺さなかったために奈落へと突き落とされ神に復讐を誓う男ちゃん』」

「なっげえ!! 長いうえに、違和感ありすぎだわ! なんで無理やり『ちゃん』付けたの!？」

「いやあ、可愛らしさも必要かな、と思って」

「これっぽっちも可愛くねえよ!!」

などと楽しく談笑していると、見るからに受け付けですよーな場所に着いた。

カウンターごしに微笑むお姉さんに、俺はウィンクしつつ、

「今夜、君の受け付けに俺を入れさ」

「それ以上は止める」

「はい」

圭子ちゃんに首根っこを鷲掴みにされ、しぶしぶ引き下がった。
しかし受け付けのお姉さんは、やはりCPUらしく、嫌な顔一つ
せずに言う。

「ギルドへと加入なさりますか？」

「あ、はい」

圭子ちゃんが受け答えしている。

「なら、こちらにサインしてください」

「はい」

スラスラつと圭子ちゃんが紙に文字を書き終わると、お姉さんが、

「では、説明をいたします」

省きます。

「フューチャークエストを楽しんでみてくださいね！」

彼女に笑顔で見送られ、俺たちはその場を後にした。

……。

「で、まずはクエストを受けるわけだが」

相変わらず、顔に似合わない男声で圭子が話す。

掲示板には、ザツ、と多数のクエストが貼られていた。
どれも初心者向けの物しかない。

「どうする？」

かわいい顔を傾げさせて訊いてくる。
もちろん、

「寝る」

「なんでだよ!？」

「いや、セーブのやり方ってクエストがあるからさ」

「あ、ああ」

俺が指差すと、ようやく圭子は理解したらしく、苦い顔をしながらも頷いていた。

内容は、ただ寝るだけ。寝ることで、セーブと回復を完了すれば
オーケーという、比較的簡単なものだ。

「で、寝る場所どこよ」

圭子がステータス画面を開いたらしく、彼女の体が、まるで時間
が止まったように固まり、そしてうつすらと青くなった。

地図を開いているのだろう。

「圭子ちゃん、もしかして寝るって……俺と？」

「なんで恥ずかしそうに言うんだよ! 気持ち悪いわ! 違うから
ね? 寝るって意味、全く違うからね!？」

「うん……分かってる。圭子ちゃんが、素直じゃないことぐらい……」

「なんで女の子キャラのオレより女々しくなってるの!？」 顔グラ

イケメンだから、余計にキモいわ!!」

「うん……初めてだから……ね？」

「声ちよつと高くすんな」

「うい、分かりやした」

「今度は声低くすんな！ 楽し ごかお前は!？」

「ハブ注入」

「なんつーもん注入してんじゃボケ!!」

ポカッと頭を殴られて、少しばかりHPが減ヒットポイントってしまった。

フレンドリーファイアありかよ……。

説明しよう！

フレンドリーファイアとは、いわゆる仲間に対して攻撃をあてることである！

よくFPSなんかにフレンドリーファイアがあるが、友達とやるならともかく、不特定多数の人とやる時はオフにしておこう！

正味、仲間から攻撃されて死ぬなんて、無様以外の何者でもないしな！

「さてと、んじゃ寝ますか」

「優しくしてね……?」

「黙れカス」

2LDKの住まいを、俺と圭子は手に入れた！

ダブルベッドに寝転がる。

男キャラである俺は、よくいびきをかいていた。

逆に、女キャラである圭子は全くいびきをかかず、丸まって眠っていた。

俺はガバツと起き上がる。

「襲ったらリアルで殺す」

圭子から聞こえたドスの利いた声で、俺はパタリとベッドに倒れた。

しかし、眠れない。

「二度寝できないみたいなんだけど」
「知るか」

もうクエストクリアなのだが、いかんせんHPが全然回復していない。

圭子はドンドンとスタミナを回復していく。
ふと、思いついたことを言ってみる。

「おっぱい揉ん」

「寝ろ」

「あいとういままてん」

また倒れる。

あと十秒で、圭子は起きる。

「ねえ、揉むくらい」

「殺す」

残り五秒。

「あっち向いてホイ、しょうか」
「ブチコロス」

だんだん、圭子の声に抑揚が無くなってきた。

残り……二秒!

ムラムラ……ムラムラ……ムラムラ……。

「今じゃあー!」

「失せる犯罪者ー!」

俺が圭子に襲いかかると同時に、彼女は『寝る』を完了しており、起きていた。

彼女は伸ばしていた俺の腕を掴み、そのまま投げとばす。

「うげっ!」

俺は壁に激突し、大の字になったままスルスルと落下した。

圭子がパンパンと両手を叩く。

「ふん、だてにメタ ギア3はやりこんでねえよ。見よう見まね、CQCだゴルア」

「い、いつの間にそんな技を……」

またHPが減った。

そろそろ危ない気がする。

「そろそろ行くぞ、犯罪者」

「こういう体力の時……どついうポケすればいいか分からないの」「死ねばいいと思うよ」

にっこりと、残酷に微笑む圭子に引つ張られ、住居を出た。

……。

ふと、住居を出た俺たちは、路地裏から声がするのを聞いていた。発声源に近づくと、なにやら顔グラがイケメンの二人が、小声で話をしている。

「ドユフ……ち、チート使って……さ、さっさとクリアしようぜ」
「オブフォ……そうでござるな……フヒヒ」

圭子よろしく、顔に似合わない脂ぎったような声を聞いた瞬間、鳥肌が立った。

「……おい、犯罪者」
「……なんだよネカマ」

さすがにずっと犯罪者呼ばわりされると、反抗意識も湧く。
圭子から歯をこすらせたような、怒りを必死に我慢しているような音がした。

「……いいか、運営にこのことを知らせるんだ。あいつらのIDと名前は覚えたか？」
「……ああ、アニメキャラの名前だから、簡単に覚えられたぜ」
「なら、行くぞ」

と、きびすを返して走り出すと、

圭子が何も無い場所ですっころんだ。

「うっふお!?!」

なんとも似つかわしくない悲鳴をあげて、ゴロゴロと転がっていき。

その悲鳴に気づき、先ほどのイケメン二人がこちらを振り向いた。

「見たなコイツら!」

ぎこちない走り方で迫ってくる。

吹き出しそうになるが、なんとかこらえて、圭子を立ち上がらせた。

「大丈夫か!?!」

「……すまない、しくじった」

それにしても、

「ふっほっふっほっ」

「はぁ……はぁ……ヒュー」

……あいつら、おっせえなあ。

俺たちはすぐに走り出し、一気に距離を空ける。

余裕だ。全然余裕だった。

あいつらはとっくに見えなくなっていた。

「はは、ざまあみ」

言葉の途中で、俺の意識が途絶えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0941ba/>

転生でチートと化した俺が女体化した友達とゲームの世界で奴隷ハーレム組ん

2012年1月2日07時46分発行